

江戸時代末期の下級武士の日記『桑名日記・柏崎日記』にあらわれた玩具

皆川 美恵子*

(1989年11月22日受理)

1. 『桑名日記・柏崎日記』の梗概

『桑名日記・柏崎日記』は、久松松平家桑名藩の下級武士である、渡部平大夫(1783—1848)と、その養子にあたる渡部勝之助(1802—1864)により、それぞれ執筆された日記である。渡部勝之助(当時38才)は、桑名藩の越後支領である柏崎へ、突如、勘定人として赴任するよう命ぜられた。この時、勝之助夫婦には、3才になる長男鐐之助がいたが、渡部平大夫(当時56才)は孫可愛さのあまり、孫を桑名にとどめ、自分たち夫婦がその養育にあたることを申し出たものと思われる。かくして平大夫は、桑名において成長する孫の生活を柏崎の勝之助夫婦に報告すべく『桑名日記』の筆を下ろした。他方、勝之助は、柏崎で新たに生まれた子どもたちをまじえて、家族の暮らしを伝えるべく『柏崎日記』の筆を執った。遠く離れて暮すことを余儀なくされた親子が、互いの家族の生活ぶりを伝え合うことを意図して交換し合った両日記には、日記誕生の経緯からして、とりわけて子どもたちの成長の記述が詳細を極めており、江戸時代末期、下級武士家庭における、稀有な育児記録ともなっている。

日記と共に、両家族は、子どもの成長を示す手形・足形や、手足の太さ・背の高さの書き付け、習字、さらに質素な生活を強いられている柏崎へ向けては、玩具・菓子・着物が届けられており、桑名に残った長男には、柏崎から両親の心のこもった品々が送られている。当時、桑名と柏崎、そして江戸藩邸と、用向きをもった使いが頻繁に三地を往還していた模様で、幸便に託された書状は、少なくとも月一回は届けられている。

本研究は、天保10年(1839年)から渡部平大夫の死をもって日記が終結する嘉永元年(1848年)までの、ほぼ10年間にわたって誌された両日記^{注(1)}に登場する玩具を拾い出し、子どもの養育の中で、それら玩具がどのように具体的に遊ばれたのかを探索するものである。そして、それら玩具が子どもをめぐる生活文化の中で含みもっていた意味性に着目し、“生きられた玩具”という動態的かつ生活誌的な深層の玩具研究を目指すものである。

2. 『桑名日記』にみる鐐之助の玩具

鐐之助3才〜13才までが『桑名日記』において記述されているが、約10年間にわたって、この子どもの熱中している遊びを眺めやると、大きく3つの遊びが年齢と共に推移しているのがみてとれる。その遊びの推移とは、太鼓叩き→凧あげ→魚釣りである。そして祖父の平大夫は、孫が元気そのもので遊びに没頭していることを柏崎の両親に誇らしげに伝達するかのよう筆致で、実に遊びを仔細に書き留めている。

まず、幼年期において鐐之助は、太鼓を叩くことに強い興味を示している。このことは、桑名という町の祭礼、石取り祭り^{注(2)}と深い関連がある。石取り祭りは、太鼓、鉦により騒々しい音を出す、俗に気狂い祭りともまで呼ばれていた春日神社の祭礼である。町の人々は、太鼓を上手に叩くことが賞讃されている。鐐之助は太鼓のバチを祖父にけずってもらい、石取り祭りをはじめ、太鼓がさかんな桑名の他の神社祭礼に出かけるたびに、ふとこころに自分のバチを携えていき、そのバチで叩いている。また家庭においても、玩具用の大きな太鼓を買い与えてもらって思う存分、叩いている。太鼓叩きが制止させられるのは、高貴な人々の逝去の折に出される鳴物・高声停止の穠便触れが出されている間のみである。

凧あげは、自分であげられない幼児の頃より登場している。そして、祖父をはじめ周囲の者の手によりあげてもらっている。凧は人からの贈り物として贈られたり、祖父母に買ってもらったり、絵の上手な人に凧絵を描いてもらい、それを貼って完成したりと、商品と手作りの品が混在している。鐐之助は、凧好きが高じてくると、雨の日でも揚げたくなり、傘張りをしている者に頼みこみ油紙で凧を作るべく大騒ぎをしている。そして、年齢と共に、大きな凧が登場しており、糸も太くなり長くなっている様子が見てとれる。鐐之助は誰が絵が上手であるか、骨をけずって凧の骨組を作るのは誰が巧みか、揚げるのは誰が名人かなど、みな知りぬいており、それぞれの人にひたすらねだっては、凧あげに明け暮れ、凧に一喜一憂する姿が細密に書き留められている。祖父は、孫の凧に尻っぽをつけたり、うなりをつけたり、毎朝、風向きを気にしたりと、少しでもよくあがるよう、いっ

* Mieko Minakawa
教養学科

しょになって風あげにとりかかっている。風の種類は、武者風、ぶか風、ふうわり風、字風、べかっこ風、まつたけ風、鯉風などである。値段は28文から100文と、年齢と共に高価な風を買い求めている。

風の遊びは11月～2月と冬の期間に集中しているが、冬も夏も一年中を通して鎌之助が熱中し、高年齢になると共にますます身を入れていく遊びは釣りである。桑名は漁師町であり、釣りが盛んな環境によるともいえるが、釣りは大人にとっても趣味として位置づく奥の深い技術が要求される遊びであり、鎌之助は幼年時代から少年時代にかけて、釣りの遊びの深遠な面白さに魅せられていく。

鎌之助3才半の折は、めだかすくいから始まり、やがて、ふな、はい、もち、はぜ、どじょう、うなぎ等の獲物をしとめていく。平大夫は、さで網やたも網を結いて作ってやったり、釣竿を使うようになると竹を伐り、空俵を燃やして竹の油をぬき取り、川の水でよく磨いてためて、釣竿をこしらえてやっている。釣針は、菊池武八という青年が上手に作ることができ、彼からもらった釣針はまるで宝物のように大切にしている。鎌之助は馬子のようにまっ黒に日焼けしながら殺生三昧の生活を続けていくが、夏の炎天下での孫を案じて平大夫は、竹で編笠を作るのが巧みな同僚の侍に依頼して、笠を孫に与えてもいる。

以上の、太鼓、風、釣りの主要な遊びの間に、多種多様な遊びと玩具が、次々と登場をみている。おみやげ等として貰ったり、買い与えられている玩具は、軍配、独楽、貝の笛、ポコベン、綿絵、草双子、五色めがね、狐面、はじき猿、弓張ちょうちん、鳶口のついた杖等である。『桑名日記』には、筆者平大夫が孫のために作って与える、手作り玩具も頻繁に描かれている。竹馬、くい打ちのくい、のろし遊びに用いる細い紙を巻いたのろし、弓矢や的、吹筒、蛸かご、笹舟、竹舟、花火、紙鉄砲、風、釣竿、観世経……。平大夫は算盤上手の蔵役人で手先が器用らしく、次から次と孫のねだるものを拵えてやっている。そして、よくも子どもは次々とほしいものが出てくると感心しているが、次に印象的な部分を少し紹介してみよう。^{注(2)}

・天保12年1月6日

鎌之助のねだりは、さかんぼう〔つらら〕がはじまり。それから紙鉄砲の音の出ぬ時に、これは牛のくそ、よく鳴るやふに紙をつめてとねだる。又、はねをつくからはねをこしろふてくれとねだる。おばばが足袋型を出して見ているを見て、おれにも足袋型をこしろふてくれとねだる。毎日三ツ四ツくらひは何かねだる。

・天保12年9月13日

けふは雨ふりにて外へは出られず、弓の矢をこしろふてくれの的をこしろふてくれのとねだる。的もこしろふてやる。矢もかん竹で矢の先へわたをかおせ、その上へきれをあててまるくくってあづける。

・天保13年6月17日

鎌之助焰硝を買ふてくれといじりぬかれ、おばば安田屋迄行き買ふて来てやる。さあおじみさ薄花火をこしろふてくんなへとねだる。桐の木を焼、けし炭をこしろふて焰硝に合せこしろふてやる。日の暮るを待ちかねる也。洗湯より帰り、まだ明るいにあげてしまう。

・弘化2年1月26日

鎌之助おばばをねだり矢田町へいっしょに行、こまを買って貰ひ、苧縄を留五郎に紮て貰ひに行候処、晩に紮てやると申故戻り、夕飯食うと御祖父さ紮てくんなへとねだる。紮てやると日の暮る迄廻して手に取とすれとも乗らず。それより盆を持出し其上へ請る。それより手に移す。五度に一度は手に取候共、こま横にくる故、手に乗ても廻らずに落る。

子どもの興味を抱いた遊びに対しては、身の危険がないかぎり、おおむね遊びを許しており禁止するということがない。本来、子どもとは好奇心が強く、人の真似をするものであり、遊びにおいても人に真似て“余念なく遊ぶ”ものと了解して、見守り、さらには支援までしているのである。

さて、鎌之助の子ども時代、玩具がひときわ集中して出現している特別の時期がある。それは、子どもの生命とりと恐れられた疱瘡（痘瘡、または天然痘とも言われる）の病気に罹患した折である。疱瘡は当時において、一度、罹病すれば二度と罹ることはない、しかしながら、初めて罹る時は、死ぬか生きるかの、まさに人の寿命を決定する怖い病気であった。子ども達はこの病気を何とか罹り越えさえすれば、生死の関門を潜り抜けたことになり、健やかな成長が約束されたようなものである。平大夫にとって孫の疱瘡は、ひときわ養育者の責任を強く感じさせる大事件であった。^{注(3)} 鎌之助は六才の時、疱瘡を発病している。そしてその折に、多くの知人縁者から病気見舞の品々が届けられている。それらを枕許に飾り置いているのだが、玩具としては、弓矢、独楽、武者風、（高さ五六寸の）土天神、草双紙、将棋の駒と盤、等である。天神人形が今日のように学問の神様とし

てのみでなく、子どもの成長を見守る神としても信仰されていたことが知りうる。さて玩具は、子どもの健やかな遊びを先取りするかのようになり、つまりは生命を取り留めさせることを約束するごとく、祝いの品として機能させられている。玩具とは、子どもが笑顔で、いきいきとこの世で生きていることを鮮やかに明示する、有意味的記号なのであろう。玩具が子どもの手に取られることによって、音が出され、勢いが発せられ、動きが生まれる。それはとりもなおさず、子どもの生命力そのものの証明と考えられたのであろう。風におけるような“風の力”、疱瘡絵に多い赤の“色の力”、太鼓に顕著な“音の力”、弓や独楽に込められた“運の力”、さらには駄洒落・もじりが活かされた玩具の名称をはじめ、戯作に裏打ちされた草双子にこもる目出度い“言葉の力”と、さまざまな力を結集している玩具は、子どもの手にしっかりと握られることによって、子どもの生命を守護する呪具へと変じている。

疱瘡罹患前のこと、鎌之助は森下紙で平大夫に紋を描いた風をこしらえてもらう。あとは揚げるための縄を用意するばかりであった。折しも外には風あげに絶好の風が吹き出してきた。すると鎌之助の祖母は、次のようにしみじみと述べている。「あのやふに風をあげたがるに、ひょっとあげぬうちにもし疱瘡にでもするとならぬから、かわいそうに、どれおれが縄を買ふてくるに、とふぞあげてやって御くれなされ」そして平大夫はじめ若い衆の三人がかりで五把の縄をもってして大空に風をあげ、縁側の柱に縛りつける。その見事にあがった風を見て、近所の子どもが集まってきて、あまりに騒々しいので数を数えたら13人の子どもが来ていたという。「鎌のよこびかぎりなし」（天保13年1月9日）と、平大夫は記述している。

大人たちが子どもの遊びをあたたく見守るのは、子どもの生命は束の間なのかもしれない、殊に疱瘡において危機的状況になると覚悟していたことにもよろう。子どもがその時その時、いきいきと遊びに熱中する歓喜を愛おしむ気持ちが、今日以上に強かったと思われる。遊びとは、子どもが己れの生命の活力をみなぎらせていることであり、それは来るべき疱瘡の危難にも充分に戦い克つことに通じると考えられていた。鎌之助の分身ともとれる風が天高く揚がることのできた、晴れやかさ。風にかぎらず、子どもの遊びには多種多様な玩具が寄せ集められ、力強く、また他愛なく、子どもの生命が予祝されていたと考えられる。

3. 『柏崎日記』にみる録の玩具

録は、鎌之助の妹、真吾の姉である。桑名において天保10年3月19日誕生。勝之助は2月24日、単身で柏崎へ

赴任し、録が生後70日位となった時、桑名に戻り、妻と赤ん坊の録を伴って、5月30日に柏崎へと旅立っている。日記には、録の出生から9才までの成長が書き留められている。

女兒の生活の中には、人形が頻繁に登場するのが、第一に目につく。姉様人形を保管するため、父親にねね様箱をこしらえてもらい、大切にしまいこんでいる。ねね様は鼻紙などで作られているが、贈り物として上質な紙で見事に作られたものも貰っている。冬にはことに雪深い柏崎にあっては、家の中で、ねね様を中心にして遊ぶ“ねね様事”と称する遊びがよく行なわれており、「けふもねね様事也」と、しばしば記述されている。このねね様遊びの初出は、録が3才の頃である。なお、2才の時には、枕や猫の子を胸に抱いたり、背中に負せて遊んでおり、「ねんねんころころ」という遊びの名称で誌され、勝之助はほほえましくも、「まだ折節ししばばの不調法もするものが…」小癪なものと記述している。

ねね様事、まます、手まり遊びと、女兒らしい遊びが続くなか、雛節句の記述は、特に詳細に記されている。下級武士の貧しい生活を強いられているものの、武士家庭にあって、女兒がいる場合、雛の祭りが重要な位置を占めていたことが読みとれる。録には玩具も少なく、赤ん坊の時、菌の生えかかる折のおしゃぶりは香の物をかじることであった。また当時の持ち遊びものとしては、お手塩の小皿をなめる位のものであった。天保11年3月3日の雛の節句は、勝之助夫婦にとっては経済的余裕もないことでもあり、できることなら初節句の祝などせず、ただ桑名で録が出生した折、祖父母から贈られた内裏様ばかりを飾るつもりでいた。しかし、そのような簡略な方法は許されない事態となる。

渡部家と親しく交際し、柏崎に慣れない若夫婦をこまごまと手助けし、子どもたちも可愛がってやまない、向いに住む竹内家の人々が、初節句に介入してくるのである。叔母さんは「明日は、おれが飾てやるとて、けふ御向の雛よきところばかり運んで置なされ候。小内裏一對、雛子方五ツ、かむろ三ツ、膳碗小道具色々屏風、毛氈まで御持参也」と、自分のところから運んできてまで飾り出す。そこで致し方なく、おこわをふかし、白酒、菱餅そして、金頭という魚で祝いの膳を調え、親しくしている人々からは人形などの祝いの品が届いているので、お返しにおこわを配って、ごく親しい者は招いて祝いを行なっている。「人のふんどしで角力取る様な事なれとも、先御かげて初節句のまねいたし、ありがたき事也」と勝之助は記すが、内心は迷惑であったのだろう。柏崎には、雛人形など一切無く、江戸から取寄せる高価なものであった。近所の子どもは珍らしいので雛見に来て騒しい始末となる。

日記には、天保11年の初節句から、日記が終りとなる嘉永元年の雛節句まで、毎年、録の成長を見守る女性たちが集い合って、祝宴を続けている模様が記録されている。天保12年は徳川家斎の薨御、弘化3年は仁孝天皇の崩御にかかり、上巳の節句に対し自粛するようにとの隱便触れが出されているが、共に、内々では雛が飾られ、静やかに祝われている有様をうかがい知ることができる。また柏崎の在郷では、3月3日は女性の健康や幸福を守る淡島神社の祭礼で、老若の女たちの参詣が賑々しい。録や勝之助の妻菊は、子守り女のすずめもあって淡島神社にも詣でている。このように在郷の文化と、土地に帰属しない武士階級にあって、女性たちは雛飾りで祭壇をしつらえ、女客がその前で集い合い、合力祈願による祭礼を繰り広げている文化の、二つの文化を見届けることができる。

4. 『柏崎日記』にみる真吾の玩具

真吾は、録之助や録の弟で、柏崎において天保13年4月11日に出生している。よって日記には、誕生から6才までの成長が記録されている。真吾は兄と同様に太鼓叩き、凧あげの遊びを行なっているが、釣りを行なっていないのが決定的な違いである。柏崎は日本海に面しているものの、藩士は誰も釣りを行なっていない。砂浜では泳ぐということも行なわれず、子どもたちは、防風という野草を採っているばかりである。桑名藩士たちは、日本海と鵜川という川に囲まれた高台に、要塞のようにそびえた陣屋の中に居住し、猟師や町人の生活とは隔絶されている。陣屋に住む藩士の家族は、近くの小さな神社仏閣の祭礼には出かけることがあるものの、大きな町の祭礼である閻魔祭礼や盆踊りなど、夜びいて行なわれるような祭礼には、陣屋の門を閉じ、外出禁止が慣習である。武士が町人の諸行に及んではならないという理由による。それに加えて、柏崎陣屋が襲撃されるという生田萬の乱が天保8年(1837)6月に蜂起したことも大いに関係している。藩士たちは、陣屋の警護を嚴重にしており、町人たちとの交渉は、日用生活の必需品を商う商人と、子守りの女たちなどの一部に限られている。開門閉門の時刻が定められ、町人文化に深く馴染むことが思うにまかせない柏崎陣屋での生活だが、子どもの遊びの文化において、桑名との違いが、釣りの遊びの有無という形で端的にあらわれている。

前述したように武士階級は土地に帰属しておらず、数十年単位で転封されている。町人や在郷の人々のように土地の神々の祭礼をもつことがない。祭礼を、その土地、土地で見物するのみである。しかしながら、柏崎陣屋の子どもたちは、祭礼を模倣するという、子どもにのみ許された祭礼を楽しんでいる。町人たちは七夕祭りに

おいて、豪華な七夕舟を作り、太鼓を叩き囃したてながら舟を曳き廻して海へと流す。陣屋の子どもたちは、自分たちで小遣銭を出し合って、小さな七夕舟を作り、中には七夕人形を飾り、陣屋の中を曳き廻しては、鵜川から海へと流している。直接的な参加ではない、間接的な祭礼への参加が子どもに限って許されている興味深い事例である。

さて、真吾は、父親が出張先などで買ってきた玩具、たとえば太鼓、駕籠のミニアチュールなどを大切に保管する持遊箱をもっている。持遊箱を拵えたのは父勝之助である。この箱の中に、特にお気に入り宝物としている玩具がある。それは、4才の時に人からもらった箱入の天神様である。その後、鳥居や御堂を父にねだって作ってもらい、お宮を飾り立て、太鼓を叩き、面をかぶっては舞を舞うというのが、真吾の好きな遊びとなる。日記には「真吾は毎日毎日降ても照ても御祭り事也」とある。祭礼の折の神楽などの賑々しい喧噪を模倣做戯している子どもの姿だが、現代の子どもがテレビや劇画の強烈な刺激的場面を追体験する遊戯と通じよう。兄の録之助のように同輩の子や年長の子と、町中を駆け廻って奔放に遊ぶことが許されておらず、狭い陣屋内での閉鎖的な生活では、玩具の天神の宮の前で、このようなコミカルな狂騒の遊びが出現したと思われる。

真吾5才の時、下に弟が生れており、母が赤ん坊にばかりきりとなると、子どものいない向いの竹内家の人々が真吾を可愛がり、よく世話をやいた。竹内家に泊りに行くことも多く、竹内家では真吾を養子にしたいとまで思うに至った。ある時、「真吾御隣にてどふだましこまれ候や、暮相におれは竹内のものになるから、おれのもの持て行から姉き手伝てくりやへと申て、持遊び類のこらず御隣へ運んで仕廻ふて泊る」という事態になる。真吾は早々に帰宅してくるのだが、自分の大切な全財産として持遊び類、すなわち玩具を持参しているほほえましい姿も描き出されている。

録においては初節句の儀礼、そして毎年、雛の節句がとり行なわれ成長が祝われているが、それなら真吾においては、どのような成長儀礼がとり行なわれているであろうか。天保13年4月11日生れの真吾は、初節句が同年5月5日だが、何事も行なっていない。翌年も、翌々年も何事もしていない。真吾が3才になった時、5月5日、外では幟が立つのを見知って、羨ましがっている。そこで父親は小さな紙幟を拵え、庭へ立ててやり、真吾は大歓びしている。毎年、紙幟を立てるが、5才になると鯉も拵えてくれとねだり、鯉もいっしょに立ててやることになる。ところで、本来、真吾3才の11月15日には、武家の子弟であるなら髪置の儀礼を行なうところである。しかし、髪置も経済的都合で行なわず、姉の7才

の紐解きに合わせて、一年おくれの4才で髪置をいっしょに祝っている。

このように真吾の場合、初幟もせず、髪置も一年おくれるが、父親が熱い思いを込めてとり行なう、真吾の成長を祝う儀礼がある。それは、5才の袴着の祝である。紋付や袴は幸いにも桑名から届けられた。勝之助は大小の刀については江戸に出向く者に依頼して、江戸で買ってきてもらうよう手配した。そしてその刀が届いた。

「牧岡（勝大夫）へ頼置候真吾の大小到来致し候。真吾おどり上り候。叔母さも見においでなされる。大小鐔は金覆輪白鮫金目貫縁頭赤銅まがへ七子金の梅の花付け鞘ろ色黒糸。中身も少々有之見てくれは一両も出そふなり。右にて代金百正也。駒蔵に為替様ならば武分之餘もかかり可申と被存候。先十才位迄は用ひられそふ也。」（弘化3年11月12日）

こうして11月15日は陣屋近くの大窪諏訪宮へ参詣し、祝宴を開いている。

子ども用の大小が、はたして玩具かどうかについては人によって意見の別れるところだろうが、武士の家に生れた男児の成長を守護し、その男児の人格のよりどころとなる呪具であることには間違いない。武士の子としての誇りの基幹となる大小は、たとえ真剣を模したミニチュールとしてのまがいものだろうが、まさに呪力を秘めた“呪具としての玩具”であると考えられる。

5. 結 び

ドイツの思想家ヴェルター・ベンヤミンは、玩具について次のように語っている。玩具とは「子どもと民衆が暗号でかわす無言の対話なのである^{注(4)}」と。玩具という「もの」は民衆の新しい生命の担い手である子どもに、^{注(5)}大人が「吹きかけた議論の産物なのである」と。もちろん子どもは、受けいれたり斥けたりした。玩具にこもる、その時代その文化での人々の思い、子どもたちの応答——それら大人と子どもとの間で行き交った思いの言葉を玩具を通して聞くことが、まずなされなければならないだろう。玩具を「もの」自体として記録・保存することも重要だが、「もの」としてよりも「記号」として読み解くことは、よりなされるべきことと思われる。本研究は、具体的な日常生活を記録した日記資料を用いることによって、「もの」から「記号」へと変化する玩具を、生活誌的文脈に注目し、子どもの生の意味との関連から読み解くことを試みた。そしてわかりえたことをまとめると次のようになる。

- (1) 寺社の祭礼や縁日などで売られる商品化された玩具が日記にも数多く出現しており、地方都市である桑名、在郷である柏崎ともに、季節の推移の中で神仏の霊験にあやかる縁起ものとしての玩具がみとめ

られた。

- (2) しかしながら玩具の中心は、養育者が子どもの欲するものを手作りで作りと与えており、玩具が子どもと周囲の人々との関係的濃密さに支えられて誕生していることが理解される。なお付言すれば、正月や誕生日は今日のように子どもへ特別な贈り物を与えていない。したがって玩具も特別に買い与えてはいない。

- (3) 玩具は子どもの成長儀礼と深く結びついており、人々の子どもの健やかな成長への思いを鮮烈に映し出している。本研究で用いた日記には、三人の子どもの成長（長男鐔之助、長女録、次男真吾）が詳述されていたが、これら三人の子どもの成長に玩具が深くかわかり、玩具を通して子どもたちのおかれている文化状況、経済状況、人間関係、性差等を読みとることができた。

①たとえば桑名で生活する鐔之助の場合、玩具が疱瘡の病気の時、特別に集中して出現していた。鐔之助は武家の子弟として、5才の袴着も盛大に祝われているが、子ども時代を脱する、生死をかけた疱瘡罹患こそが、晴れがましい通過儀礼として位置づいている。周囲の者は病氣快復を真剣に祈り、病児の枕辺に次々に玩具を届けるが、それら玩具の意味するところは既述した如く大きい。

②録は3才で髪置が祝われ、かんざし等が贈られている。又、4才の時、疱瘡に罹っているが、病氣見舞の品として、人形、手鞠、菓子、草双子が届けられている。柏崎という土地柄、親戚縁者もなく、豊富に現具が届いてはいない。めったに物をねだることのない録だが、病児の時、友人のもっている子ども用三味線をほしがる。病氣快復後、父は祝いとして八十五文（糸代別に五〇文）の三味線を買って与えている。子どもに高価な玩具を買い与える特別に稀な場合である。

録にとっては初節句の雛祭りが、最も賑々しい玩具の出現であった。雛人形は都市文化の中から誕生した商品だが、下級武士の、それも柏崎という在郷の地でも、この雛人形を飾り置き、女兒の成長を祝う祭壇となっているのが見とけられる。またそこには、小さな女兒を見守る女性たちの協同体のネットワークが結集しているのも認められる。

- ③次男の真吾においては、初幟も簡略化され、紙の鯉が父親によって作られた。さらには3才の髪置も一年延期された。しかし、5才の袴着は

略されることなく、武士の子どもの人となりを支える大小の刀が江戸で求められ、晴れやかに祝われている。

三人の子どもは、渡部勝之助と菊との間に誕生した子どもたちだが、子どもの置かれている状況によって、かくも玩具とのかかわりに顕著な相違をみせている。そして、それらの判然とした相違のあり方から、玩具の含みもっていた多様な声を聞くことができた。玩具とは、生物としての人間生命のいのち、女兒のいのち、武士の子弟のいのちなど、いのちを守護するすぐれた呪具であること。大人と子どもという関係の中の、さらに個々の子どもに向けて語りかけられた切要な呪言の重々しさ。それらの呪言を、玩具はみごとに語りえている。

〔注〕

- (1)「桑名日記・柏崎日記」の執筆期間は次の如くである。なお、勝之助が妻子を連れに戻った間、桑名日記は記述されなかった。また、勝之助が出張した2つの旅行中も柏崎日記の記述はない。

「桑名日記」…天保10年（1839年）2月24日——嘉永元年（1848年）3月4日

しかし、天保10年4月22日——同年5月29日は記述なし

「柏崎日記」…天保10年（1839年）8月6日——嘉

永元年（1848年）3月22日

しかし、天保10年8月28日—同年9月27日

天保14年9月14日—同年壬戌9月10日は記述なし

両日記は、現在、桑名郡多度町の旧家伊東家に所蔵されている。昭和46年三重県有形文化財に指定された。

- (2)日記の引用にあたっては読みやすくするため、句読点をほどこし、一部、漢字を平仮名に変えてある。なお、玩具には棒線をほどこした。

- (3)江戸時代における子どもの病気である疱瘡については、次の論考に詳述してある。

皆川美恵子「日本近世子ども事情の一側面——疱瘡における子どもからくり——」『武蔵野女子大学紀要』VOL. 23, 1988

- (4)ヴァルター・ベンヤミン「おもちゃの文化史」『教育としての遊び』丘澤静也訳 晶文社 1981

- (5)ヴァルター・ベンヤミン「おもちゃとあそび」前掲書

〔附記〕

本研究は、第2回佐藤玩具財団の研究奨励にもとづいてなされたものである。ここに財団の名を記して感謝の意を表したい。